

## 神並遺跡第17次発掘調査報告



D地区弥生～古墳時代河川掘削風景(東から)

財団法人東大阪市文化財協会

2001年12月

## 例言

1. 本書は共同住宅建設に伴う神並遺跡第17次発掘調査の報告書である。
2. 本調査は住友商事株式会社と株式会社熊谷組の委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が実施した。調査に伴う工事は住友商事株式会社と株式会社熊谷組から発注され安西工業株式会社が行った。
3. 現地調査と整理は金村浩一を担当者とし、事務局体制は次の通りである(2001年12月現在)。

理事長 日吉亘

常務理事 北山良(東大阪市教育委員会社会教育部参事)

事務局長 小島進

調査部長 同上(兼務)

庶務部長 同上(兼務)

庶務部員 朝川直美 大林亨

調査補助 榎本雅則 奥座吾 榎谷雅幸 高松正伸 中川義夫 西脇順三 橋川敦子 福山幸・福井三貴子 重定礼子

4. 調査における上色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準上色帖』に準じた。
5. 遺構実測は建設省告示による国土座標第VI系を使用し、基準点の移設と写真測量は株式会社かんこうに委託した。水準高はT.P.値を用いた。
6. 動物遺体の同定は財団法人東大阪市文化財協会調査員別所秀高による。
7. 本書の執筆と編集は金村が行った。
8. 本調査の経費はすべて住友商事株式会社と株式会社熊谷組のご負担によるものである。調査に御理解と御協力をいただき、深く謝意を表したい。
9. 現地調査は安西工業株式会社による協力によって円滑に進行した。記して謝意を表したい。

## 目次

### 例言

### 目次

第1章	はじめに	1
第2章	調査の結果	4
	層序の概略	4
	検出された遺構と遺物	10
	弥生～古墳時代の河川	10
	平安時代の遺構と遺物	26
	鎌倉～室町時代の遺構と遺物	30
	江戸時代以降の遺構と遺物	31
第3章	まとめ	40
BS上面写真測量図		
報告書抄録		

## 第1章 はじめに

神並遺跡は東大阪市東石切町・西石切町他にひろがり、生駒山西麓の中位段丘上から沖積扇状地斜面上に位置する。現地表面は約T.P.+16～45mを測る(図1.1)。

神並遺跡の西には弥生時代の集落や平安～室町時代の集落が発見されている西ノ辻遺跡・植附遺跡が接し、北には現在では石切劔箭神社となっている白鳳時代に創建されたと考えられる法道寺跡が、南には船古墳・若宮古墳群が位置する。これらの遺跡は行政的な区分であり各時代の集落のひろがり等は遺跡範囲を越えていたと考えられる(図1.2)。

神並遺跡は1981(昭和56)年に近畿日本鉄道東大阪線建設に伴う試掘調査によって発見された。この鉄道建設は第三阪奈有料道路建設等の道路整備と合わせて行われることとなり、1981(昭和56)～1982(昭和57)年に、これらの建設予定地のうち約4052m<sup>2</sup>を対象に神並遺跡第1次発掘調査が実施された。その結果、縄文時代早期の土器や鎌倉～室町時代の集落跡が発見された(注1)。その他の鉄道建設に伴う発掘調査は1991(平成3)年に終了したものの軌道・道路が整備されるに従い共同住宅建設等が遺跡範囲内で増加し、発掘調査も増加した。現在では28次におよぶ発掘調査が実施されている(2001年1月現在)。それらの調査によって古墳時代の住居跡や平安時代の集落跡等が発見され、神並遺跡が縄文時代から現代に至る複合遺跡であることが明らかになりつつある(注2)。

今回、住友商事株式会社と株式会社熊谷組によって東大阪市西石切町1丁目7-1他において共同住宅の建設が計画された。計画地が神並遺跡の範囲内に位置するため東大阪市教育委員会文化財課によって試掘調査が実施された。その結果、発掘調査の必要が指示され、関係機関の協議の結果、財団法人東大阪市文化財協会が発掘調査を実施することとなった。

調査着手前の調査地は北東から南西に緩やかに傾斜する空地であった。空地となる以前は先の鉄道建設等の事務所として使用されていた。北は神並遺跡第3・4次発掘調査地である近畿日本鉄道東大阪線等が接し(注3)、西は神並遺跡第9次発掘調査地である共同住宅が(注4)、東には神並遺跡第23次発掘調査地である共同住宅が隣接している(注5)。西の敷地は現地表面で最大約2mの段をなして調査地よりも低

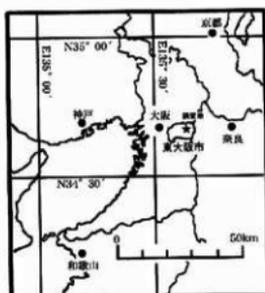


図1.1 東大阪市及び調査地位置図(S=1/200,000)



図1.2 調査地及び周辺遺跡位置図(S=1/25,000)

くなっていた(図1.4)。

調査は試掘結果にもとづき、現地表面下約0.7mまでの盛土・現代耕土層を機械によって掘削し、以下を人力によって掘削しつつ遺構や遺物の検出作業等を行う計画であった。なお、鋼板打設等の土留め工事を施さず素掘りで実施している。計画当初の調査面積は約1496㎡であったが、進入路確保等のため一部を断念し、必要に応じて一部を拡張したため最終的に調査面積は約1461㎡となった。残土仮置等のため調査区をA～D地区に区割りし、A・B地区を埋め戻した後、C地区に着手し、C地区を埋め戻した

後、D地区に着手した(図1.5)。各地区内では国土座標を基準とした5m四方の小地区を設定し遺物を取り上げた。各地区のBS上面でクレーンによる写真測量を株式会社かこうに委託して実施している。BS上面以外の遺構は平板測量を行った。D地区を調査中に兵庫県南部地震(阪神大震災)が発生したが、若干の遅延をきたした以



図1.3 A地区北西部機械掘削風景(南から)  
後方の高架は近畿日本鉄道東大阪線。

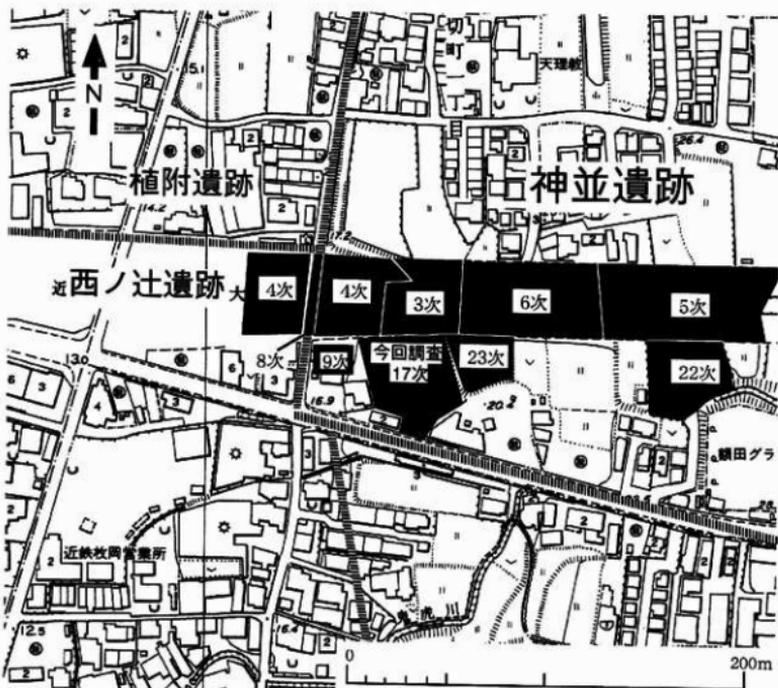


図1.4 調査地及び周辺主要調査位置図(S=1/2,500)

外に影響無く調査を終えることができた。

調査の結果、弥生～古墳時代の河川や平安時代のピット他を検出し、整理箱(外寸386mm×59mm×155mm)に45箱の土器類(復元した状態を含む)、5箱の木器類、1箱の骨類・サヌカイト片・種子等を得た。加工の施されていない木はサンプルを採取し投棄している。出土遺物には遺跡の略称、次数、登録番号を注記している(例:KUM17R001)。これらの遺構や遺物は調査前に予想されたものよりも少なく、調査期間や費用は計画よりも若干減少した。もちろん、遺構や遺物の多少は調査の価値を減ずるものではなく、今回の調査によって神並遺跡の様相を知る貴重な資料を得ることができた。次章に調査の結果を略述する。なお、調査期間は1994(平成6)年9月19日～1995(平成7)年1月25日である。

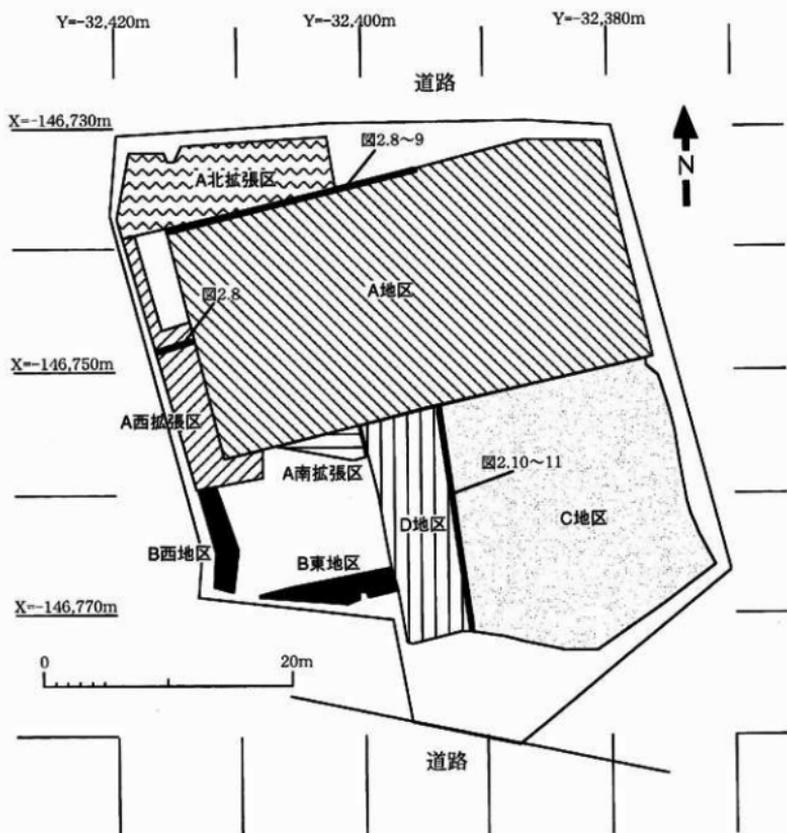


図1.5 調査地区割及び土層図位置図(S=1/400)

## 第2章 調査の結果

### 層序の概略(図2.1～11)

調査で掘削した下底は更新統最上部に相当する主に黄色を呈する細砂～粘質シルトである。いわゆる地山であるが、「不適切である。(中略)「更新統からなる基盤で、その上面を便宜的に掘削底とした」という意味で「ベースメント」(BS)と呼ぶ。」との指摘があり(注6)、本報告では地山と呼ばずBSと呼称する。

調査区内の堆積状況は一様ではない。

A地区東部とC・D地区の北部は近年の盛土直下がBSであった。BSは東から西へ、北から南へ低くなる。遺構がほとんど検出されなかったことから、かなり削平を受けていると考えられる。

A地区の西部はBSが東から西へ低くなり、その上に耕作土(第I層)が堆積していた。第I層は多くの層に細分され、その上面・層中・下面で多数の溝が検出された。第I層からは土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器等が出土しており、江戸時代以降に堆積したと考えられる。第I層の上には床上、現代耕土、盛土が堆積していた。

C・D地区の南部は上層から盛土、現代耕土、近世遺物を包含する耕作土(第II層)、中世遺物を包含する耕作土(第III層)、にぶい黄褐色砂礫混砂質シルト(第IV層)、BSの順に堆積していた。第II層は多くの層に細分される。第IV層は耕作に伴う造成土と考えられる。第II層は江戸時代以降に堆積したと考えられる。第II層上面、第III層上面、第IV層とBS上面で溝等を検出し、BS上面では河川やピット等を検出した。

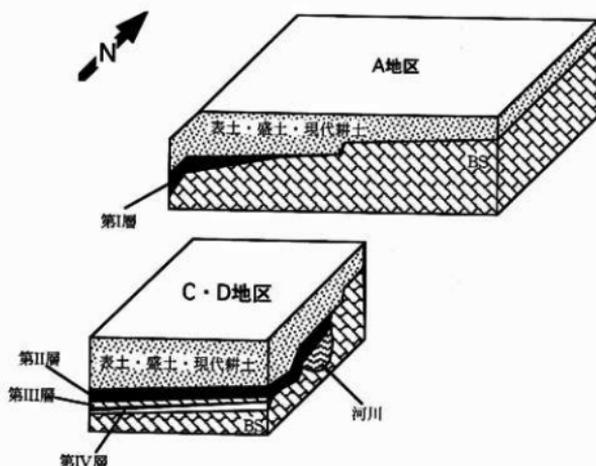


図2.1 調査区層序模式図



図2.2 A西拡張区部の段土層断面(南から)



図2.3 A地区西部の北壁土層(南東から)



図2.4 C地区南部の西壁土層(東から)



図2.5 C地区中央部の西壁土層(東から)  
白線より上を機械掘削した。



図2.6 D地区南部の西壁土層(東から)

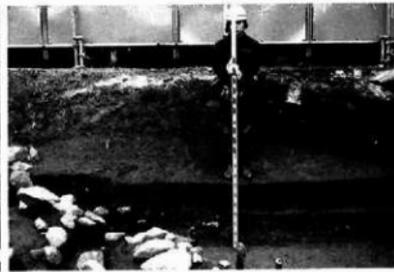


図2.7 C地区西部の南壁土層(北から)

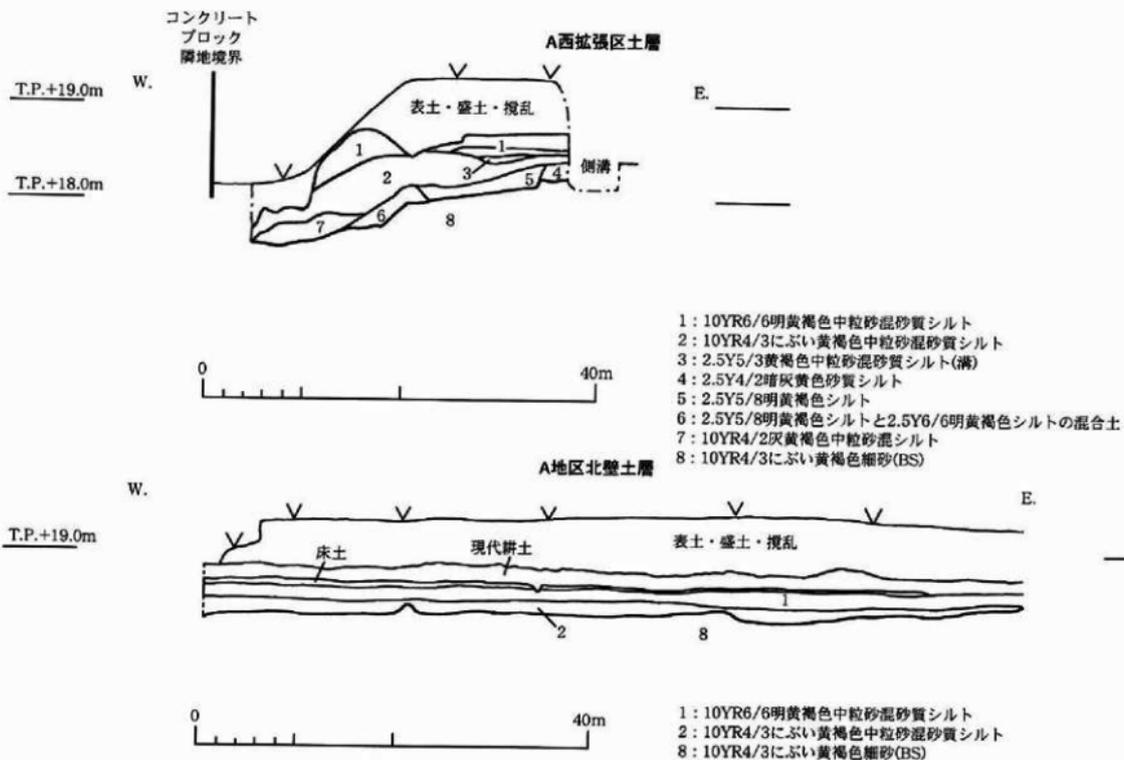


図2.9 A地区北壁土層図(S=1/50)

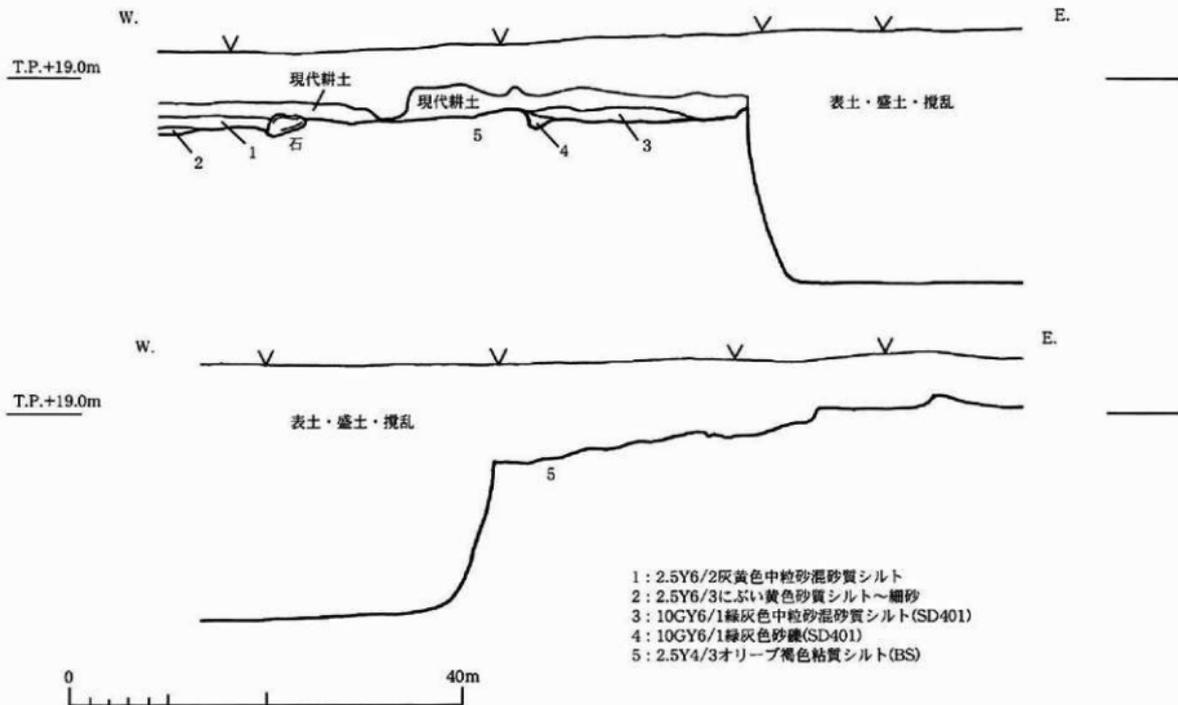
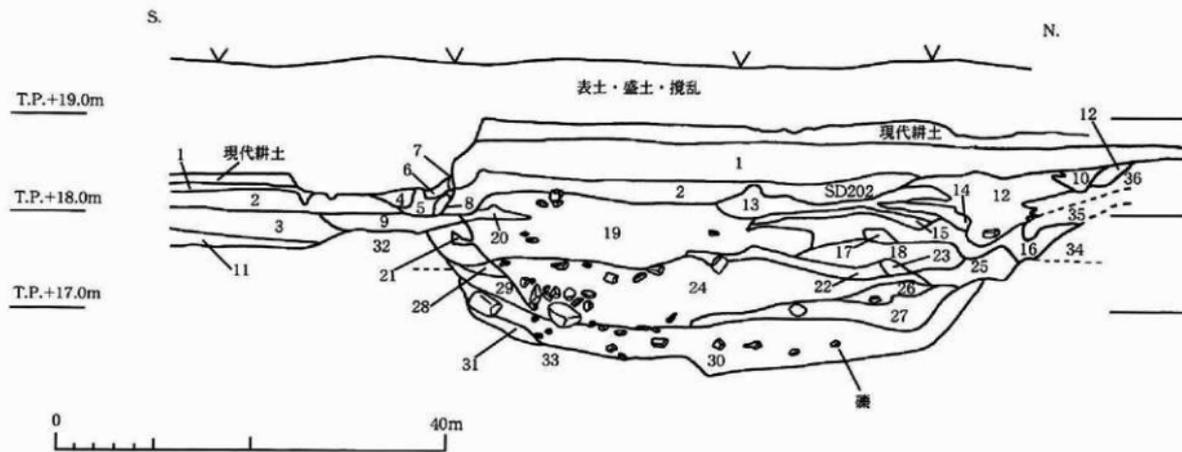
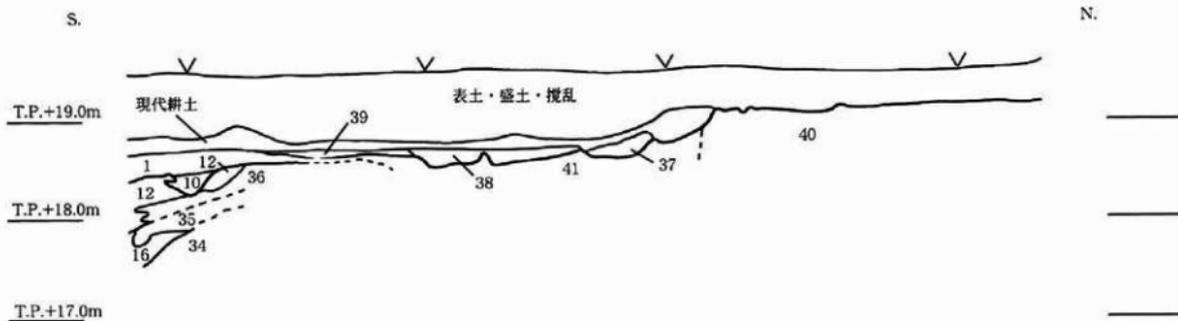


図2.10 C地区西側南半土層図(S=1/50)



- |                                    |  |  |
|------------------------------------|--|--|
| 1 : 2.5Y6/4にぶい黄色砂～砂礫混砂質シルト(第III層)  | 13 : 7.5Y5/2灰オリブ色砂礫～細砂(河川上層)           | 25 : 5GY3/1暗オリブ灰色細砂質シルト(河川中層)          |
| 2 : 10YR6/1靑灰色砂混砂質シルト～粘質シルト(第III層) | 14 : 2.5Y6/2暗灰黄色砂礫混砂質シルト(河川上層)         | 26 : 5GY3/1暗オリブ灰色砂礫～粗砂(河川中層)           |
| 3 : 5YR4/3にぶい赤褐色砂礫混砂質シルト(第IV層)     | 15 : 5Y6/3オリブ黄色細砂(河川上層)                | 27 : 5B3/1暗青灰色細砂礫混じり(河川中層)             |
| 4 : 7.5Y4/1灰色砂礫混中粒砂～細砂(SD402)      | 16 : 10YR4/3にぶい黄褐色砂混砂質シルト(河川上層)        | 28 : 5BG4/1暗青灰色粘質シルト(河川中層)             |
| 5 : 5Y4/1灰色細砂(SD301)               | 17 : 10Y5/1灰色中粒砂混砂質シルト(河川上層)           | 29 : 7.5Y6/2灰オリブ色中粒砂(河川中層)             |
| 6 : 10Y6/1灰色粘質シルト(石垣裏込め)           | 18 : 6B4/1暗青灰色砂礫混粘質シルト(河川上層)           | 30 : 2.5GY3/1暗緑灰色砂礫(10cm以上の礫が多い)(河川下層) |
| 7 : 10Y6/1灰色粘質シルト(石垣裏込め)           | 19 : 10YR3/2黒褐色砂礫(2cm以下の礫が多い)(河川上層)    | 31 : 5G4/1暗緑灰色細砂～砂礫(河川下層)              |
| 8 : 2.5GY4/1暗オリブ灰色粘土(石垣裏込め)        | 20 : 2.5Y6/1黄灰色細砂(河川上層)                | 32 : 5YR3/3暗赤褐色粘土(BS)                  |
| 9 : 10YR3/1黒褐色砂混シルト(SD201)         | 21 : 2.5Y6/2暗灰黄色粗砂(河川上層)               | 33 : 5G5/1緑灰色粗砂(BS)                    |
| 10 : 7.5Y4/2灰オリブ色砂質シルト(溝)          | 22 : 6B3/1暗青灰色粘質シルト礫混じり(河川上層)          | 34 : 5Y5/3灰オリブ色粘土(BS)                  |
| 11 : 7.5Y3/1オリブ黒色砂礫(SX01)          | 23 : 7.5Y7/1灰白色砂礫(河川上層)                | 35 : 10Y5/1灰色中粒砂混細砂～粘質シルト(BS)          |
| 12 : 7.5Y4/2灰オリブ色砂礫～粗砂(河川上層)       | 24 : 2.5GY3/1暗緑灰色砂礫(20cm以下の礫が多い)(河川中層) | 36 : 10Y7/1灰白色粘土(BS)                   |

図2.11 C地区西端北半土層図(S=1/50)



- 1 : 2.5Y6/4にふい黄色砂～砂礫混砂質シルト(第II層)
- 10 : 7.5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト(溝)
- 12 : 7.5Y4/2灰オリーブ色砂礫～粗砂(河川上層)
- 16 : 10YR4/3にふい黄褐色砂混砂質シルト(河川上層)
- 34 : 5Y5/3灰オリーブ色粘土(BS)
- 35 : 10Y5/1灰色中粒砂混細砂～粘質シルト(BS)
- 36 : 10Y7/1灰白色粘土(BS)
- 37 : 2.5Y4/4オリーブ褐色砂混砂質シルト(SD501)
- 38 : 7.5Y7/2灰白色砂混砂質シルト(SD401)
- 39 : 7.5Y7/3浅黄色砂混細砂質シルト(第II層)
- 40 : 10YR4/3にふい黄褐色粘土(BS)
- 41 : 5Y4/1灰色中粒砂混細砂質シルト(BS)

### 検出された遺構と遺物

弥生～古墳時代の河川(図2.10～81)

調査区南部(B・C・D地区)のBS上面で1条の河川を検出した。東から西へ流れ、最大幅約10m、最深約3mを測り、長さ約38mを確認した。埋土は主に人頭大～拳大の礫から砂礫によって構成される。鉄分の沈着する部分があり、これより上位を上層とし、以下を中層、最下部の礫層を下層として遺物を取り上げた。出土土器の種類と破片数は表に示した(表2.1)。土器以外の遺物に長さ160cm以上を測る棒状木製品や長さ65cm以上を測る槽状木製品、種子、馬歯、サヌカイト片等がある。この河川は遺物から弥生時代中期には存在し、古墳時代にはほぼ埋まったと考えられる。

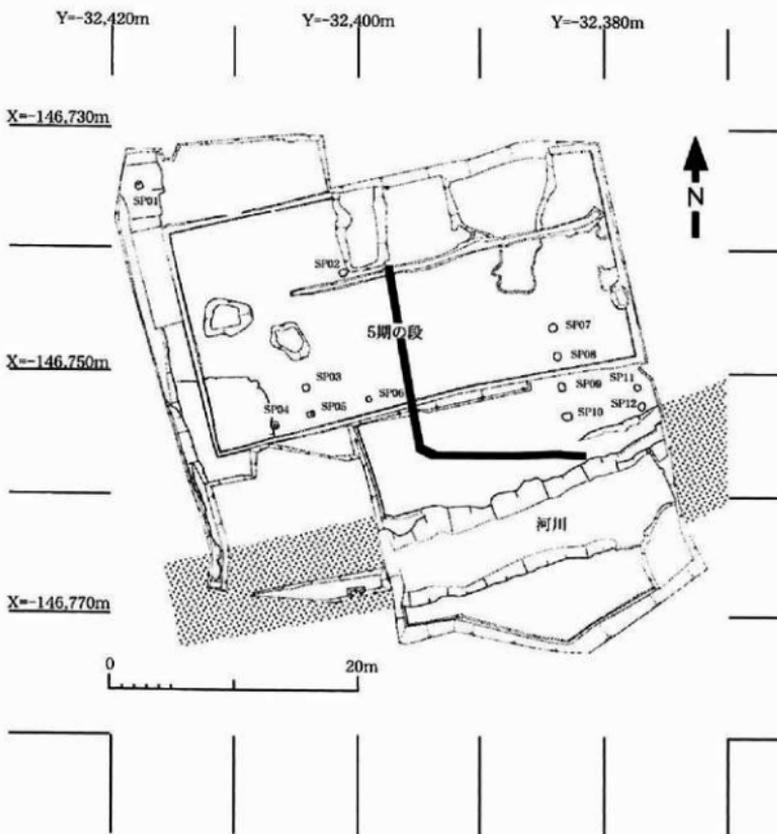


図2.12 BS上面検出遺構(弥生～平安時代)平面図(S=1/400)



図2.13 C地区BS上面全景(西から)  
中央が河川。その底では倒木を検出した。



図2.14 C地区BS上面全景(北から)  
上方の石は江戸時代以降の段に伴う石垣。



図2.15 河川細部(西から)  
奥の石は溜池の石垣。



図2.16 倒木細部(北から)  
神並遺跡第8次調査では更新世末、最終氷期の埋没林と考えられる株が検出されている。この倒木も同じ埋没林の一部と思われる(注7)。



図2.17 河川中央部畦土層(西南から)

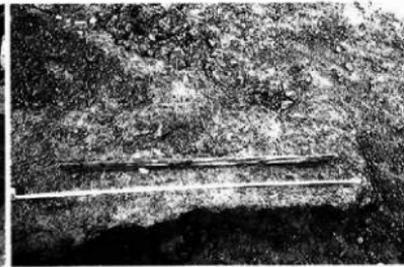


図2.18 河川上層棒状木製品出土状況(北から)  
加工跡は不明瞭であった。  
長さ160cm以上を測る。



図2.19 槽状木製品出土状況(南から)  
長さ65cm以上を測る。

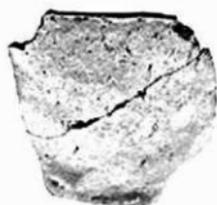
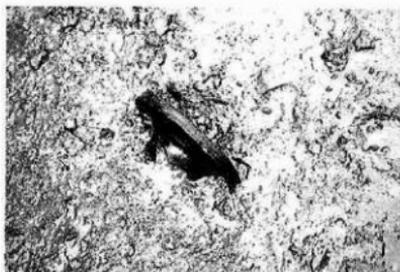


図2.20 河川出土弥生土器壺  
上は出土状況。口径19.0cm。



図2.22 河川出土弥生土器片口鉢

図2.21 河川出土弥生土器瓶  
口径18.0cm、器高10.1cm。



図2.23 河川出土弥生土器高坏

図2.24 河川出土弥生土器  
中段右の破片は円形  
浮文と簾状文を施す。



図2.26 河川出土土師器瓶  
上は出土状況。  
口径29.0cm、器高約33cm。



図2.25 河川出土弥生?器台?  
口径25.2cm。

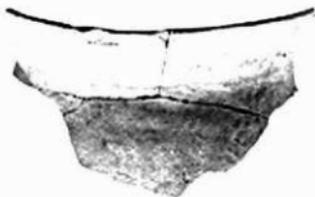


図2.27 河川出土土師器甕  
口径23.6cm。



図2.28 河川出土土師器甕  
右は裏面。接合痕を明瞭に残す。

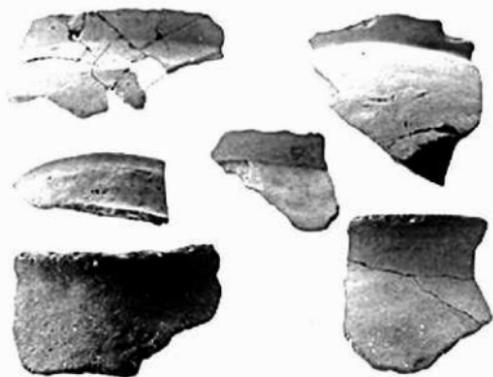


図2.29 河川出土土師器甕  
左上は口径30.0cm。

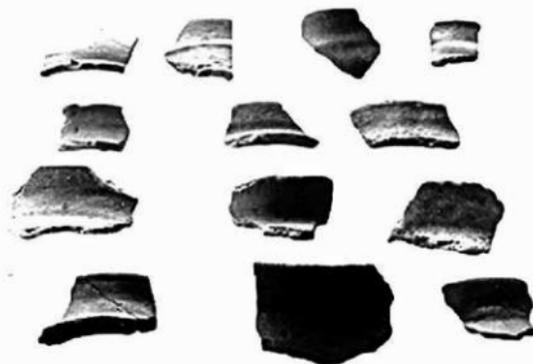


図2.30 河川出土土師器  
甕壺類

図2.31 河川出土土師器  
把手各種



図2.32 河川出土土師器釜  
左下口径22.0cm、  
右下口径20.0cm。

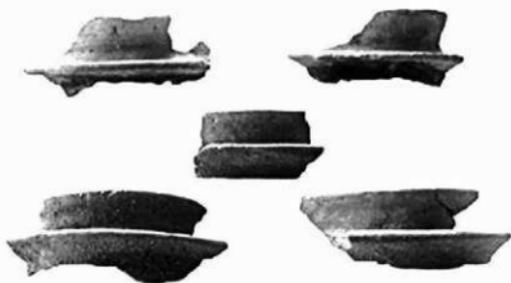


図2.33 河川出土土師器  
竈等





図2.34 河川出土土師器高坏  
口径14.0cm、器高7.5cm。



図2.35 河川出土土師器高坏  
口径16.0cm、器高9.5cm以上。



図2.36 河川出土土師器高坏脚  
右は内面。紋り込みの痕跡が明瞭に残る。脚高5.1cm。



図2.37 河川出土土師器高坏脚  
底径10.0cm。



図2.38 河川上層出土土師器高坏脚



図2.39 河川出土土師器杯  
口径15.0cm、器高7.5cm。



図2.40 河川上層出土土師器杯  
内面に一段の放射暗文を施す。  
口径13.0cm、器高4.0cm。



図2.41 河川出土土師器杯  
内面に一段の放射暗文を施す。  
口径19.0cm、器高6.7cm。



図2.42 河川出土土師器杯  
内面に一段の放射暗文を施す。  
口径14.0cm、器高5.5cm。



図2.43 河川出土土師器碗  
内面に二段の放射暗文を施す。  
口径7.5cm、器高5.1cm。



図2.44 河川出土土師器坏等  
 左下の3点は同個体の  
 壺。  
 中段右の坏は口径  
 12.0cm、  
 下段右の坏は口径  
 11.0cm。



図2.45 河川出土須恵器壺  
 下段の3点は同個体。  
 外面に波状文を施  
 す。



図2.46 河川出土須恵器  
 壺口縁  
 右上は外面に波状文  
 を施す。



図2.47 河川出土須恵器甕口縁  
外面に垂直方向と斜めの櫛描き文を施す。



図2.48 河川出土須恵器甕口縁  
外面に波状文を施す。  
口径20.0cm。



図2.49 河川出土須恵器甕頸部  
外面に篦描き斜め沈線を施す。



図2.50 河川出土須恵器甕口縁  
外面に篦描き斜め沈線を施す。



図2.51 河川出土須恵器甕口縁  
口径20.0cm。



図2.52 河川出土須恵器甕口縁  
口径約21cm。焼け歪みが著しい。



図2.53 河川出土須恵器甕  
口径12.7cm。



図2.54 河川出土須恵器壺  
口径11.6cm。



図2.55 河川出土須恵器台付はそう  
外面に垂直方向の篋描き沈線を施す。  
胴部最大径9.6cm。



図2.56 河川出土須恵器はそう  
胴部最大径10.2cm。



図2.57 河川出土須恵器はそう  
外面に波状文を施す。



図2.58 河川出土須恵器はそう口縁  
体部外面に波状文を施す。



図2.59 河川出土須恵器壺  
口径8.6cm。



図2.60 河川出土須恵器横瓶  
口径11.5cm、器高27.5cm。

図2.61 河川出土須恵器  
高坏等  
脚部外面には波状文  
を施す。



図2.62 河川出土須恵器高坏脚3点  
右上は底径8.0cm、  
右下は底径8.4cm。





図2.63 河川出土須恵器高環  
口径13.0cm。



図2.64 河川出土須恵器蓋  
器高5.7cm。



図2.65 河川出土須恵器蓋  
上段左から2点目は  
外面に弱い刺突文を  
施す。



図2.66 河川出土須恵器蓋等  
左上の3点は筧記号  
が残る環。  
右上は赤色顔料が付  
着する蓋の口縁。  
下段の6点は碗。



图2.67 河川出土须惠器坏  
口径8.0cm、器高2.5cm。



图2.68 河川出土须惠器坏  
口径9.0cm、器高3.2cm。



图2.69 河川出土须惠器坏  
口径9.0cm、器高4.0cm。



图2.70 河川出土须惠器坏  
口径10.0cm、器高3.6cm。



图2.71 河川出土须惠器坏  
口径14.0cm、器高4.2cm。

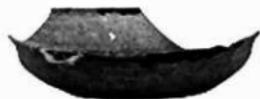


图2.72 河川出土须惠器坏  
口径10.0cm、器高4.9cm。



图2.73 河川出土须惠器坏  
口径14.0cm、器高5.5cm。



图2.74 河川出土须惠器坏  
口径12.6cm、器高4.8cm。



図2.75 河川出土須恵器坏  
口径10.0cm、器高3.0cm。



図2.76 河川出土須恵器器台  
外面に波状文を施し、焼成は土師質を呈する。口径23.0cm。



図2.77 河川出土製塩土器  
上段右の6点は口縁部。



図2.78 1~3:河川出土動物遺体  
4~5: SX101出土動物遺体  
1: 歯(同定不能)  
2: 牛右下顎大白歯  
3: 馬?牛?の上脛骨  
4: 牛右下顎大白歯  
5: 馬右上顎大白歯

遺物は河川全体から出土しており、特に集中していた部分は無かった。

第I~IV層や次に述べる平安時代以降の遺構からも弥生~古墳時代の遺物が出土している。その多くは細片であるが、右下の須恵器坏蓋のように1/2~3/4が遺存するものがある。

また、後述するSX101から出土した動物遺体(図2.78)は本来、河川に堆積していた可能性がある。



図2.79 A地区第I層出土土師器壺

種類	下層	中層	上層	合計	%
須恵器坏	0	63	189	252	
須恵器高坏	0	6	34	40	
須恵器碗	0	2	5	7	
須恵器蓋	0	12	42	54	
須恵器はそう	0	1	14	15	
須恵器壺	0	38	173	211	
須恵器甕	3	137	786	926	
須恵器横瓶	0	0	1	1	
須恵器器台	1	0	2	3	
須恵器不明	0	1	7	8	
須恵器合計	4	260	1253	1517	46.7%
土師器坏	0	3	139	142	
土師器高坏	0	12	71	83	
土師器釜	0	41	432	473	
土師器甕	3	31	224	258	
土師器壺	0	1	5	6	
土師器甗	0	2	13	15	
土師器甗	0	2	12	14	
土師器不明	4	74	593	671	
土師器合計	7	166	1489	1662	51.1%
製塩土器	0	10	22	32	1.0%
弥生土器	8	16	15	39	1.2%
合計	19	452	2779	3250	100%

接合作業後、明らかに同個体と思われるものを除いた破片数を数えた。10cm四方の破片も1cm四方の破片も1個としている。そのため須恵器甕や土師器釜等とは実態よりも多く数えている可能性が高い。

ここに示した数値はあくまでも目安である。

表2.1 河川出土土師器破片数

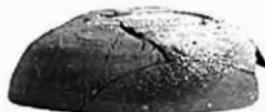


図2.80 C地区第III層出土須恵器坏蓋  
口径10.2cm、器高3.8cm。



図2.81 A地区第I層出土須恵器坏蓋  
口径9.8cm、器高3.7cm。



図2.82 A西拡張区北西端のBS上面(西から)  
中央のやや左がSP01。



図2.83 A地区西南部のBS上面(東南から)  
手前の溝に接する方形がSP06。  
女性が立つ位置にビットが存在すると柱  
間220cm前後の欄列とも思われるが、詳  
細は不明である。



図2.84 A地区BS上面全景(西から)  
奥の右にSA01を構成するビット2基が位  
置する。  
手前の右、溝がめぐる方形はSX101。

平安時代の遺構と遺物(図2.12・2.82～91)

A地区とC地区北部のBS上面で12基のビットを検出した。これらのビットからは土師器や須恵器、黒色土器A類の微細片等が出土したが、詳細な時期は決定し難い。ここでは9～10世紀に属するものとする。

A北拡張区西端部のSP01は深さ約60cmを測り、径約10cmを測る柱痕跡を確認できた。組み合う柱穴は検出されず、調査区外へのびる掘立柱建物の東南隅柱穴とも思われるが詳細は不明である。土師器皿、甕等の微細片が出土している(図2.86)

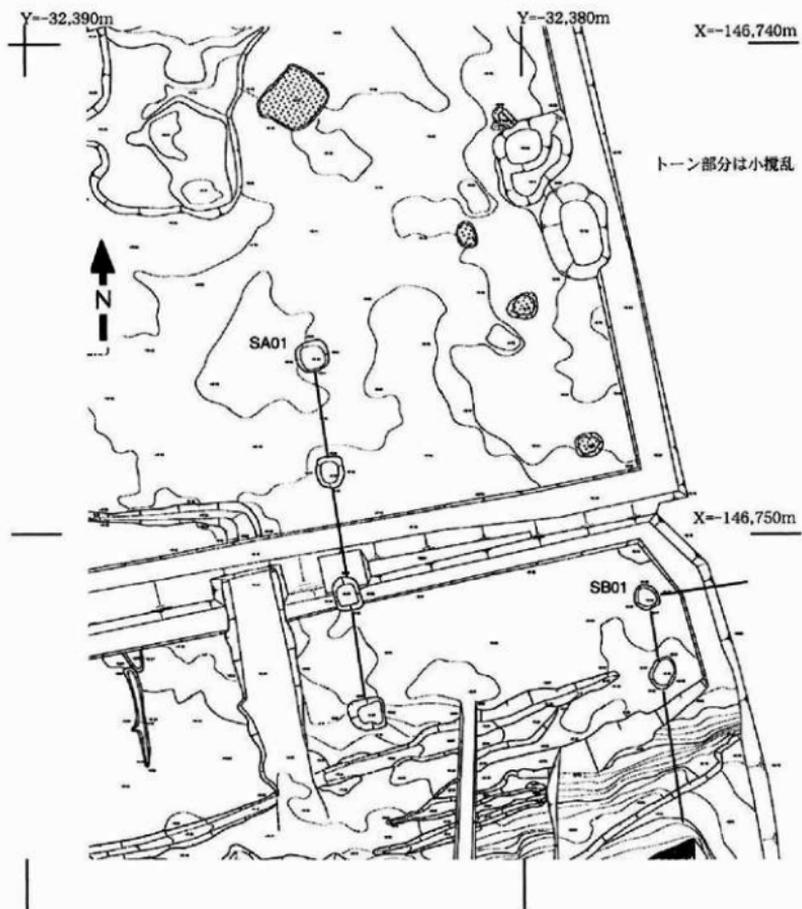
A地区中央部のSP02は深さ約12cmを測り、柱痕跡は確認されなかった。組み合う柱穴は検出されず、詳細は不明である。

A地区西南部には4基のビットが検出された(SP03～06)。SP04、SP05、SP06は一列に並び、SP03はこれらに直交する地点に位置する。しかし、SP04と05の間は約310cm、SP05と06の間は約470cm、SP03と05の間は約220cmを測る不揃いなもので掘立柱建物の痕跡とは考えにくい。SP03～06はいずれも深さ8cm前後と浅く、柱痕跡が確認されなかったこともあり詳細は不明である。

A地区東南部からC地区北東部にかけて一列に並ぶ4基のビットが検出された(SA01・SP07～SP10)。ビット列の軸はN-9°30'-Eの方位をとり、SP09のみ柱痕跡が確認された。これらは削平された南北3間の掘立柱建物の東辺である可能性が高いが、組み合う柱穴が検出されず、欄列として報告する。

C地区北端部、SA01の東には2基のビットを検出した(SB01・SP11～12)。2基のみの検出であるが、SA01と同様な方位をとることから、調査区外へのびる掘立柱建物の痕跡と考えられる。SP11と12の間は約160cmを測り、柱痕跡は確認されなかった。SP11は深さ約5cmを、SP12は深さ約6cmを測る。また、付近のごく狭い範囲には土師器や須恵器、製塩土器を含む褐色粘質シルト層が分布していた(図2.89)。SB01を構築する際に施された整地層であろうか。

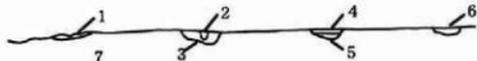
また、第I～IV層や後世の遺構からは平安時代の土師器や須恵器、緑釉陶器、製塩土器、軒平瓦等が出土している(図2.87～91他)。



T.P.+20.0m

S.

N.



- 1: BSブロック混10YR8/1褐灰色細砂混粘質シルト(SP10)
- 2: 10YR5/1褐灰色細砂混粘質シルト(SP09柱状)
- 3: BSブロック混10YR8/1褐灰色細砂混粘質シルト(SP09崩方)
- 4: 10YR4/3にふい、黄褐色細砂混粘質シルト(SP08)
- 5: 5GY3/1暗オリーブ灰色粘質シルト(SP08)
- 6: 5GY3/1暗オリーブ灰色細砂混粘質シルト(SP07)



- 7: 5Y8/6黄色粘質シルト(BS)

図2.85 BS上面SA01・SB01平面図及びSA01断面図(S=1/100)



図2.86 SP01出土遺物  
上は土師器皿、下は土師器壺口縁部。



図2.87 D地区第III層出土軒平瓦  
法通寺軒平瓦I類(注8)。焼成は須恵質。



図2.88 A地区第I層他出土の平安時代遺物  
左の2点は製塩土器、右は須恵器甕・壺。

図2.89 SB01付近褐色粘質

シルト層出土遺物

1~3:須恵器蓋

4~5:須恵器坏

6~7:須恵器壺

8:土師器壺

右上6点:土師器坏

右下6点:製塩土器

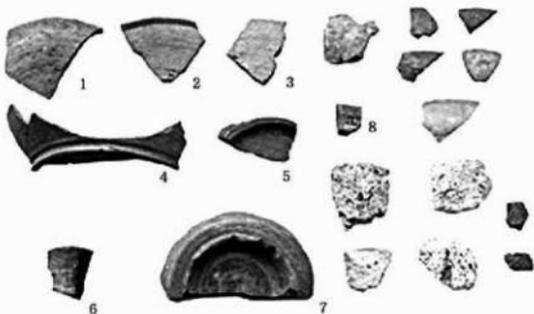


図2.90 A地区第I層出土の平

安時代遺物

1:土師器鉢

2~5:土師器碗

6~7:黒色土器

8:須恵器坏

9~10:須恵器蓋

11~13:緑釉陶器

14:土師器釜

15:土師器壺

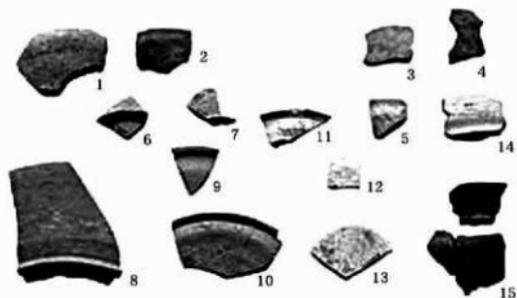


図2.91 C地区SX01出土遺物

1:須恵器蓋

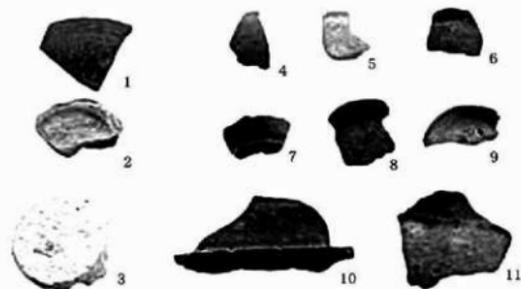
2~3:緑釉陶器

4~5:土師器皿

6~9:黒色土器

10:土師器釜

11:土師器壺



鎌倉～室町時代の遺構と遺物(図2.91～92)

C地区南端部のBS上面で最深約56cmを測る落ち込み(SX01)を検出した。南北3m以上を測り、ほとんどは調査区外となる。北肩は後に述べる石垣に攪乱され平面図では楕円形を呈するが、本来は東西方向の溝状と思われる。埋土は主に礫によって構成され、平安時代の土器とともに土師器皿や動物遺体等が出土した(図2.78・91)。調査時には中世の河川と考えたが、詳細は不明である。

また、第I～IV層や次に述べる江戸時代以降の遺構からは土師器皿や瓦器、瀬戸皿、白磁、青磁等が出土している(図2.94・100～101・104～107・117)。それらは概ね12～15世紀に属するものであり、調査地の西方に位置する西ノ辻・植附遺跡の集落に関係するものと思われる。

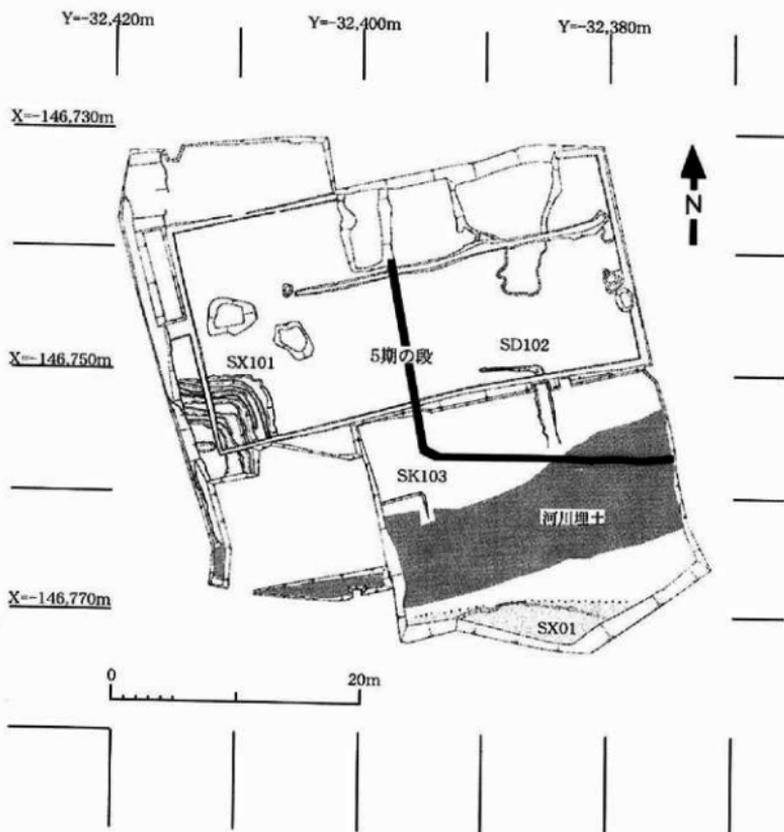


図2.92 BS上面検出遺構(鎌倉～江戸時代1期)平面図(S=1/400)

江戸時代以降の遺構と遺物(図2.92~120)

A地区のBS上面・第1層上面、C・D地区の河川埋土上面と第IV層上面・第III層上面・第II層上面で土壌、ピット、杭、溝、段、石垣等検出した。遺構から出土した遺物が微細なことから、これらは耕作の痕跡と考えられる。ベースとなる各層は盛土であり、包含されている遺物が堆積時期を直ちに示すものではない。ここでは憶測を交えつつ、遺構の変遷を6期に分けて述べる。

#### 1期(BS上面)

A地区東南端部で東西約7m以上、南北約9m以上を測る方形の落ち込み(SX101)を検出した。西は4期の段によって切られ、南は調査区外となる。内部には逆L字状の最深約8cmを測る溝が五重にめぐる。溝やSX101の下部からは土師器や須恵器、瓦器等の微細片が出土し、上位からは伊万里の微細片等が出土した。このSX101は傾斜地を擁壁状に造成した耕作の痕跡と考えられる。

C地区中央部の直角に曲がる溝(SD102)やD地区中央部の方形の土壌(SK103)もSX101と同様な擁壁状に造成した耕作の痕跡と考えられる。SD102とSK103からは微細な土師器や須恵器、瓦器等が出土した。

1期は江戸時代初期頃であろうか。しかし、推測できる資料がなく詳細は不明である(図2.92~94)。

#### 2期(河川埋土上面・第IV層上面)

C・D地区南部のSX101は第IV層によって埋められ平坦にされる。古墳時代河川の南肩と中央付近に段が造成され、段には幅約150cm、深さ約20cmを測る溝(SD201・SD202)が伴う。第IV層からは土師器や須恵器、瓦器等が、SD201・SD202等の遺構からは土師器や須恵器、瓦器等の微細片が出土した。

2期は江戸時代中期頃であろうか。しかし、推測できる資料がなく詳細は不明である(図2.95~97・101・110)。

#### 3期(第III層上面)

A地区西南部ではSX101が埋められ、南北方向の小溝が存在する。A地区西北部では東西方向の溝が存在し耕地が異なっていたと思われる。

C・D地区南部では第III層が盛られ平坦面が拡大する。2期のSD201が伴う段は踏襲され、石垣が構築さ



図2.93 A地区西南部BS上面  
SX101近景(北西から)



図2.94 SX101出土遺物  
(1~11:上位・12~13:下位)

1・13:土師器皿2~3・8~9:瓦器鉢4:須恵器鉢5:瓦器撞鉢6:伊万里7:瓦器釜10:土師器釜11:円筒埴輪12:陶器



図2.95 D地区南部の河川埋土・第IV層上面  
左の石列は3期の石垣。左の白線より左は河川埋土。右の白線は第IV層の北肩。石列と右の人物の間がSD201。



図2.96 D地区南部の河川埋土・第IV層上面(東から)  
白線は古墳時代河川北肩。



図2.97 C地区南西部BS上面検出状況(南から)  
掘削済みの溝は第III層上面の遺構。  
右の落ち込みは溜池の掘り方。



図2.98 C地区南部3期の段に伴う石垣(西から)  
撮影時はBS上面の状況。



図2.99 D地区南部3期の段に伴う石垣(西から)  
D地区では石垣裏込めと石垣に伴う溝を  
同時に掘削してしまった。

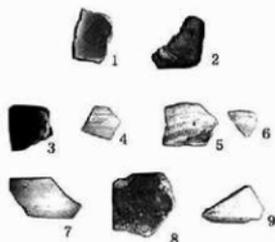


図2.100 C地区第II層出土遺物

1:青磁2:土人形3:陶器4:青磁5~6:瀬戸皿  
7:陶器8:瓦器9:須恵器鉢



図2.101 C地区第II・III・IV層出土遺物(1~9:  
第II層・10~14:第III層・15:第IV層)

1~2・13:土師器釜3・11:青磁4・12・14:  
白磁5:伊万里6:須恵器鉢7~9・15:瓦器  
10:瓦器碗



図2.102 A地区西部BS上面調査風景(南から)  
手前の落ち込みはSX101。



図2.103 A地区西南部第I層上面(北から)  
左の白線は第I層の分布の西限。他の白線は  
BS上面検出の溝。



図2.106 A地区第I層下位出土遺物  
1・4:土師器皿2・6・7・9・14:瓦器碗3:瀬  
戸5:唐津8・10~11・16:土師皿12:瓦器火舎  
13:土人形15:白磁



図2.104 A地区第I層上位出土遺物1  
1・10:瓦器碗2・17:唐津3・5:瓦器火舎4:土  
人形6・13:陶器7:瀬戸8:青磁9・11~12・14:  
土師器皿15:土師器焙烙16:土師器釜

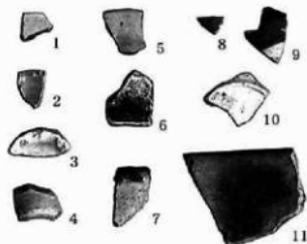


図2.105 A地区第I層上位出土遺物2  
1・4~5:唐津2:施釉土師器皿3:陶器6・11:  
瓦器火舎7:須恵器鉢8~9:天目10:白磁



図2.107 B地区第I層出土遺物  
1:青磁2・7・11:瓦器碗3:施釉土師器皿4:緑  
釉壺5・14:唐津6・8:白磁9:瓦器撞鉢10:土師  
器碗12:土師器皿13:灰釉陶器

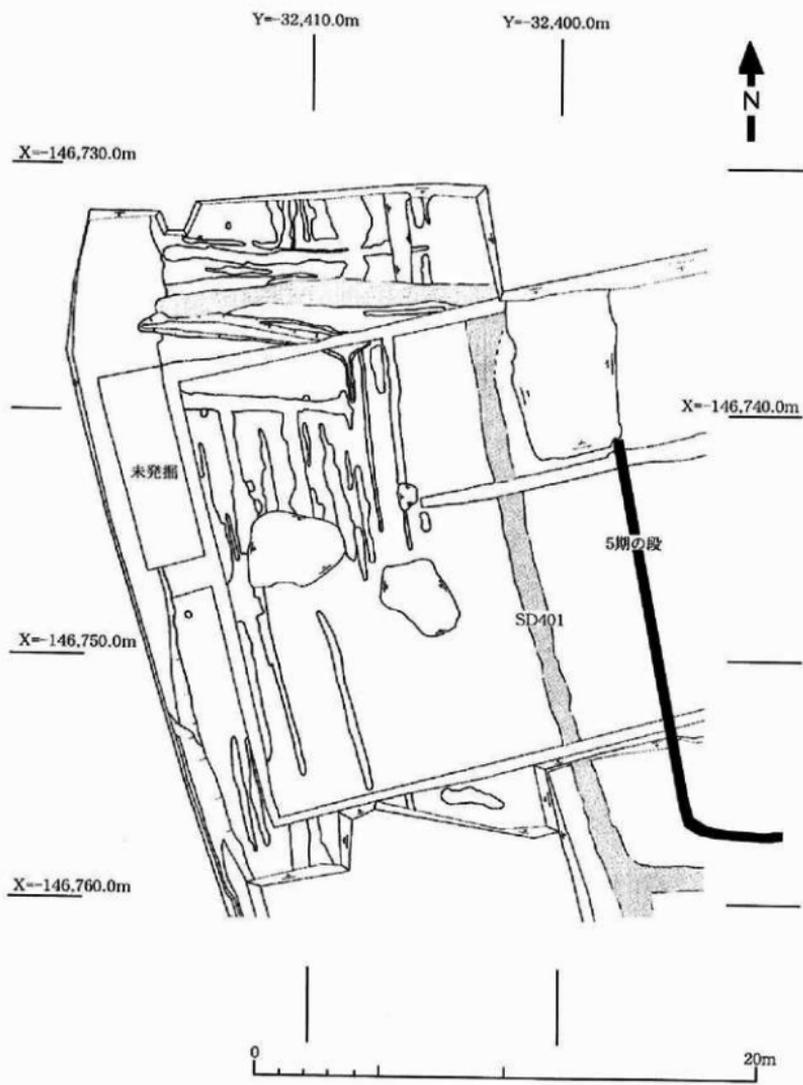


図2.108 A地区西部BS上面遺構平面図(S=1/200)

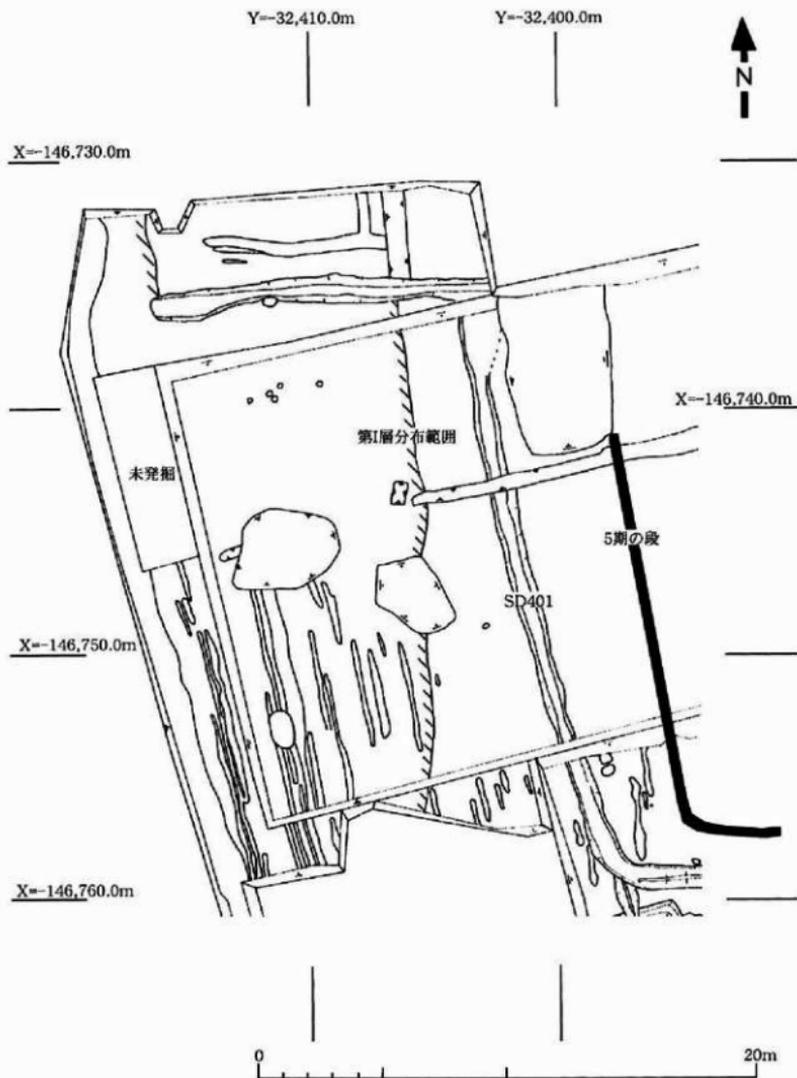


図2.109 A地区西部第I層上面遺構平面図(S=1/200)

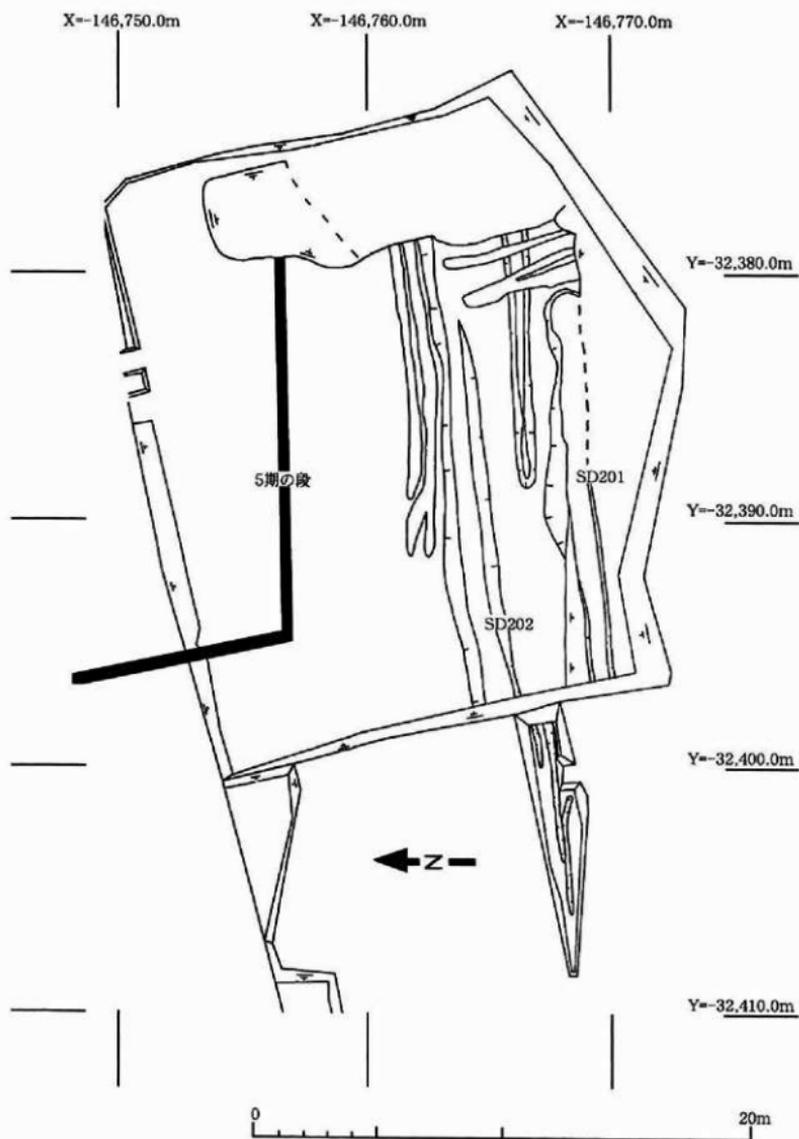


図2.110 C・D地区河川埋土・第IV層上面遺構平面図(S=1/200)

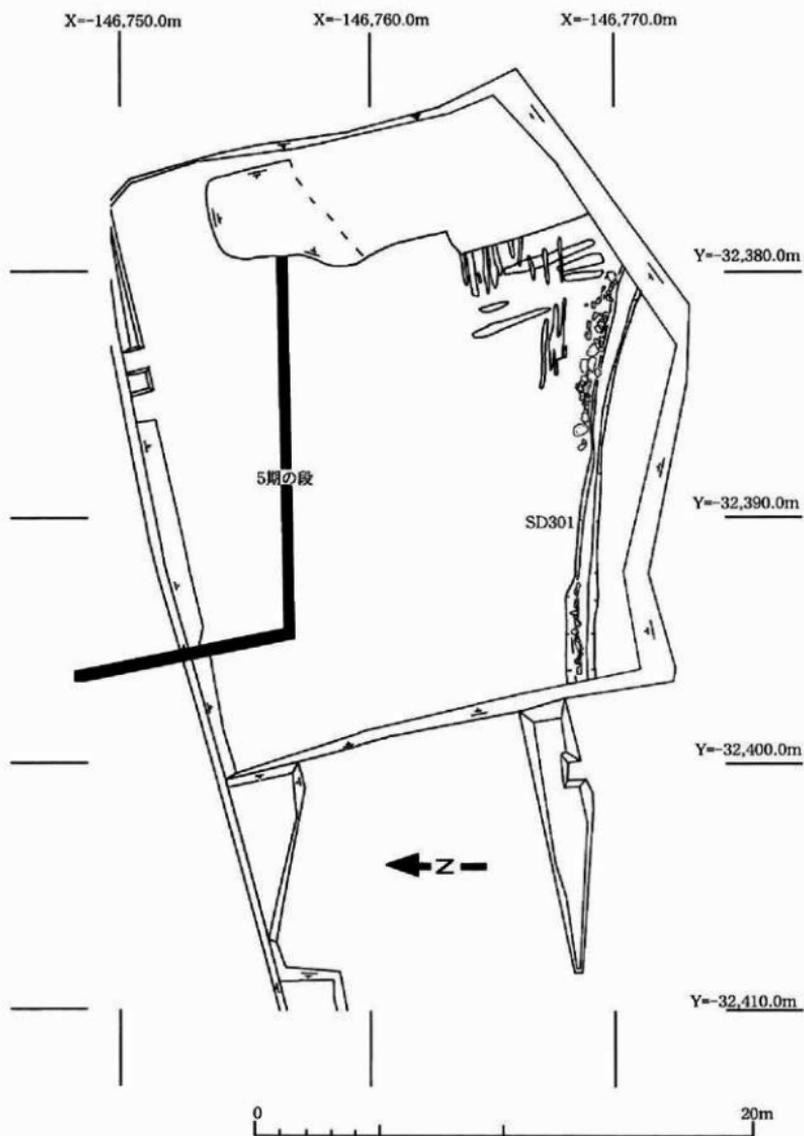


図2.111 C・D地区第III層上面遺構平面図(S=1/200)

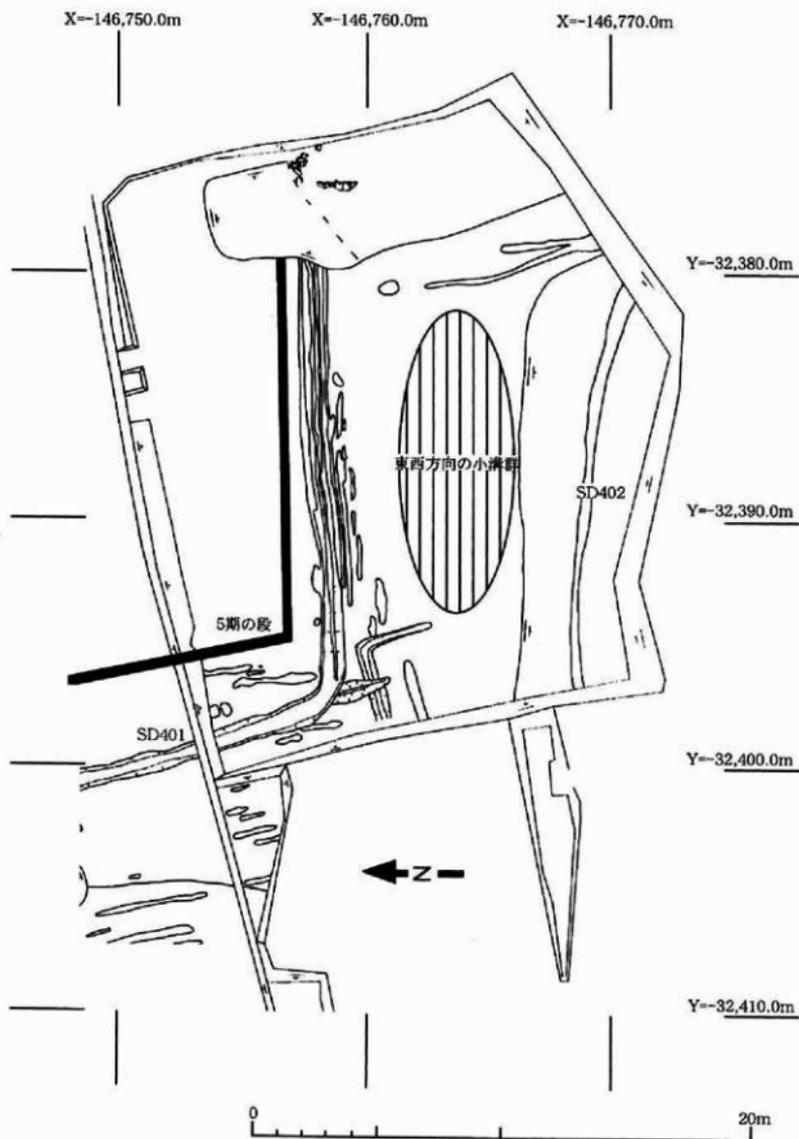


図2.112 C・D地区第II層上面遺構平面図(S=1/200)

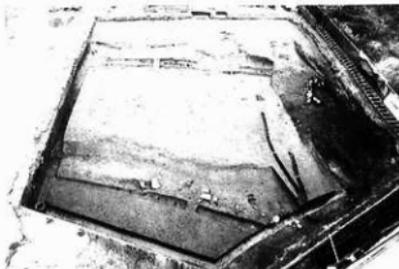


図2.113 C地区第II層上面全景(南から)  
手前の石列は3期の石垣。



図2.116 D地区第II層上面全景(南から)  
手前の石列は3期の石垣。  
右奥の高まりは5期の段。



図2.114 C地区中央部第II層上面(西南から)  
平坦面に東西方向の溝を多数検出したが  
掘削しなかった。

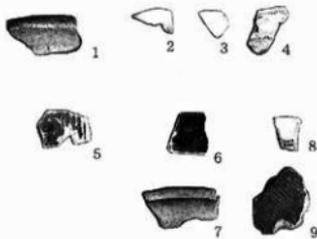


図2.117 C・D地区第II層上面SD402出土遺物  
1:須恵器鉢2~3・8:土師器皿4:円筒埴輪  
5:瓦器擋鉢6・9:瓦器碗7:土師器釜

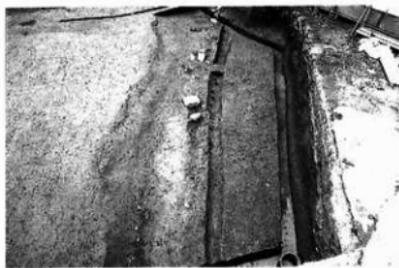


図2.115 C地区南部第II層上面(西から)  
石列は3期の石垣。



図2.118 C地区溜池北肩の石垣(南から)  
西肩には石垣が見られなかった。  
裏込めには拳大~人頭大の礫を使用。



図2.119 B地区西端の段(南から)  
右に短い白線は河川北

れる。石垣は1段のみであり、大きなもので長さ約50cm、幅約30cm、厚さ約30cmの石を使用している。また、石垣の南面には溝(SD301)が伴う。C地区東南部の小溝群は4期に属する可能性が高い。第III層からは土師器や須恵器、瓦器等の微細片が出土した。

3期は江戸時代中期頃であろうか。しかし、推測できる資料がなく詳細は不明である(図2.98～99・101～102・108・111)。

#### 4期(近世包含層上面)

A地区西部では第I層が盛られ平坦面が造成される。第I層は数層に分かれ、各層境で溝を検出していることから一挙に盛られたものではない。第I層からは土師器や須恵器、瓦器、陶器、磁器等の微細片が出土した。A地区西端は段を成す。A地区西部からC・D地区北部には鍵状に曲がるSD401が掘削される。SD401には多数の杭が伴い、段に伴う溝であったと考えられる。

C・D地区南部では第II層が盛られ平坦面が拡大する。第II層も数層に分かれ、各層境で溝を検出していることから一挙に盛られたものではない。3期の石垣を伴う段は引き続き踏襲される。SD401の南では全面に東西方向の小溝群が検出されたが、時間の都合で掘削しなかった。第II層からは土師器や須恵器、瓦器、陶器、磁器等の微細

片が出土した。第II層出土の焙烙等から、4期は江戸時代後～末期頃と思われる(図2.100～102・103～107・109・112～117・119)。

#### 5期(近世包含層上面)

平坦面はさらに拡大されSD401を伴う段は削平される。新たに溝(SD501)を伴う段が造成される。

A地区西端の段と3期の石垣を伴う段は引き続き踏襲される。

A地区西端に井戸が、C・D地区南部に溜池が築造される。

5期は江戸時代末期～明治時代頃であろうか。しかし、推測できる資料がなく詳細は不明である(図2.118～120)。

#### 6期

5期の状況は現代(近畿日本鉄道東大阪線建設が着手される1980年頃)まで続いていたようである。調査地が工事事務所として使用される際に、段や溜池は削平もしくは埋められ、西端の段を残して、緩やかな傾斜を持つ平坦地に造成された。

## 第3章 まとめ

今回の発掘調査では弥生～古墳時代の河川、平安時代の建物、江戸時代以降の耕作跡等を検出した。ここでは調査の結果から推測されることがらを略記してまとめとする。

弥生～古墳時代の河川からは多くの土器が出土したが、遺構は検出されなかった。弥生時代の土器は出土点数が少なく、調査地が当時の集落の縁辺部であったことをうかがわせる。それに対して古墳時代の土器点数は多い。後世の削平によって遺構が検出されなかったとすれば、調査地は古墳時代の集落の居住域であったと想像される。が、土器は上流から流されて来た可能性もあり、断定できない。古墳時代の様相については今後の課題としたい。なお、河川はこれまでの調査でも検出されている(図3.1)。

平安時代の建物等が検出され、遺構に伴うものではないが緑釉陶器や製塩土器等が出土し、調査地は集落の居住域であったと考えられる。しかし、今回の調査では建物配置や集落範囲等を知る資料は得られなかった。今後の調査に期待したい。

平安時代集落の廃絶後、「11世紀後半には、地形的に安定した神並遺跡の西半分のひとつが、耕作地になっている」とされている(注10)が、今回の調査では具体的な様相を知る資料は得られなかった。検出された耕作跡で最も古いものは、江戸時代初期頃、遑つても室町時代後半と思われる。それもSX101等、小面積の平坦面を髷壇状に造成し耕地を確保するものであった。調査地は南西端が北東端よりBS上面で約1.4m低い傾斜地であり、大面積の耕作に不可欠な排水路等が検出されなかったことから、調査地の全面が耕地であったとは考えにくい。このような江戸時代初期頃の状況を見ると平安～室

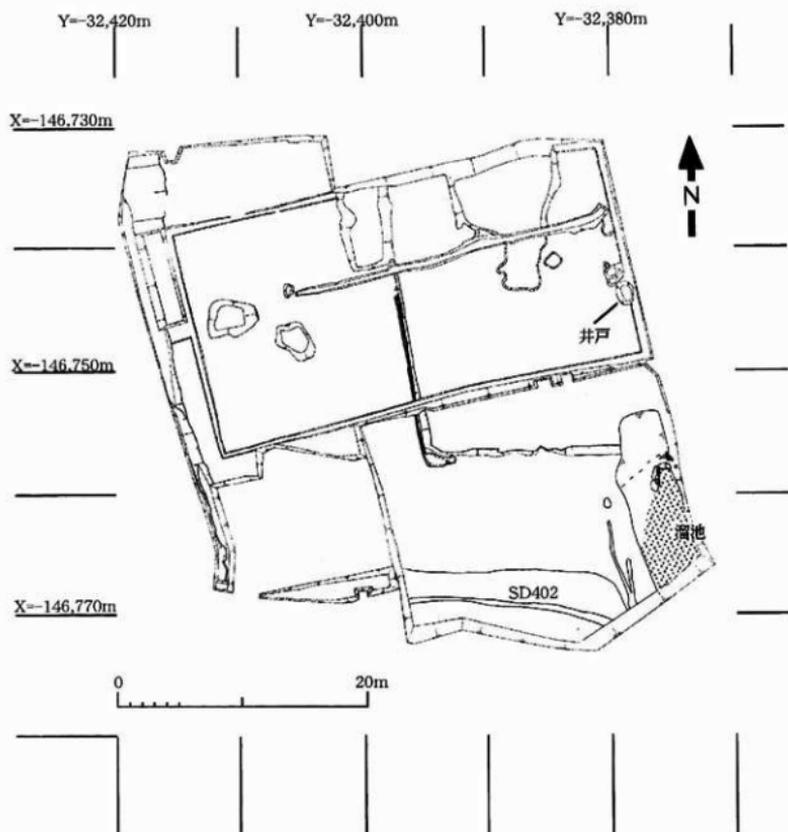


図2.120 井戸・溜池(鎌倉～江戸時代以降)平面図(S=1/400)

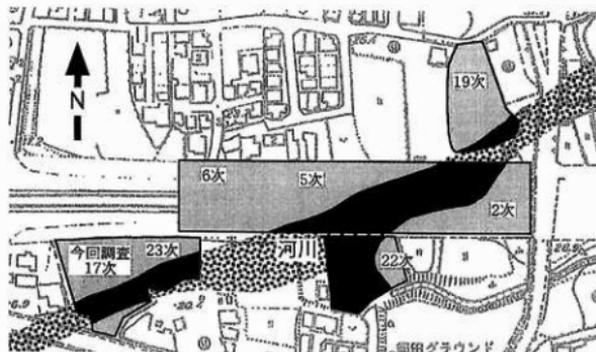


図3.1 これまでに検出された弥生～古墳時代河川想定図(注9)

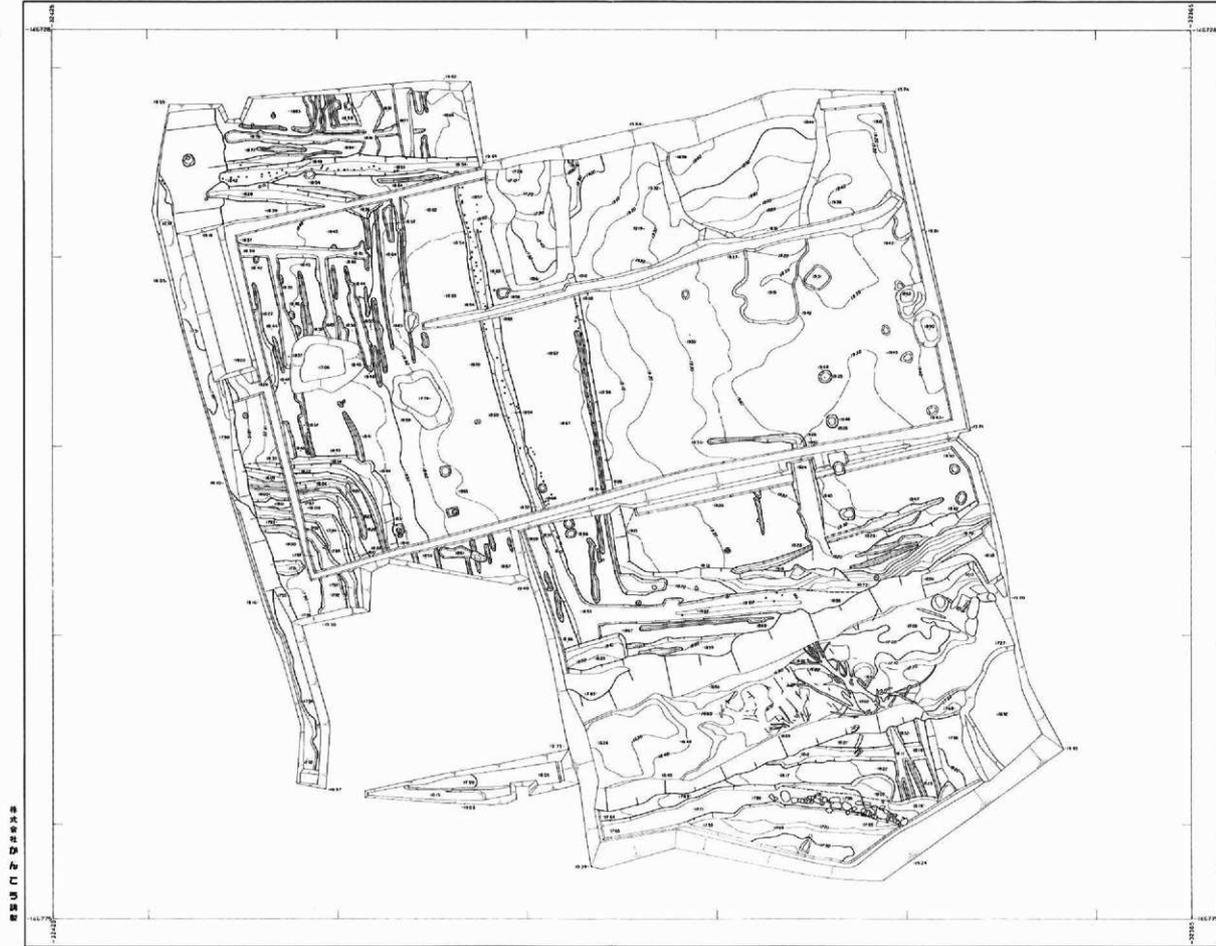
町時代にかけての調査地は傾斜が緩やかな北西端部を除き、耕作が及ばない放置された状況であったと思われる。平安～室町時代にかけて調査地周辺は、緩斜面や河川跡等の開発しやすい場所が耕地とされ、近年の水田のように傾斜地でも平坦地でも全面に耕地がひろがる状況とは異なっていたと思われる。

SX101廃絶後は平坦面の拡大が常に図られる。時代は下がるが井戸や溜池といった用水施設の充実も図られ、この時期に耕作形態が大きく変化したことがうかがわれる(注11)。そして変化した形態は近年に耕地が廃絶するまで継続されていたと考えられる。

## 注

- 1: 東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会(以下協会)『神並遺跡I』1986
- 2: 神並遺跡第22次発掘調査までの成果は概要を記した一覧表が下記の文献に掲載されているので参照されたい。  
協会『神並遺跡発掘調査報告集-第9・10・18・19・22次調査-』2000(以下協会2000) P.3~4
- 3: 東大阪市教育委員会 協会『神並遺跡III』1988  
協会『神並遺跡第4次発掘調査現地説明会資料』1988 現在報告書作成中
- 4: 『第2章 神並遺跡南西端の中世堤状遺構とその後の耕作地跡-共同住宅建設に伴う神並遺跡第9次発掘調査報告-』協会2000
- 5: 『第2章 神並遺跡第23次発掘調査報告』協会『船山遺跡第3次・神並遺跡第23次発掘調査報告書』2001
- 6: 前掲注4 P.10
- 7: 協会『神並遺跡西端部の水路跡と埋積谷下水1-10工区管渠築造工事に伴う神並遺跡第8次発掘調査報告』1997
- 8: 協会『法蓮寺』1985
- 9: 東大阪市教育委員会 協会『神並遺跡II』1987  
神並遺跡第5次発掘調査と同第6次発掘調査は大阪府教育委員会によって実施された。それぞれ57-3区・58-17区と59-5区と称される。5次・6次は東大阪市での呼称である。  
大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要-I-東大阪市東石切町・西石切町所在-』1984  
大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要-III-東大阪市東石切町・西石切町所在-』1986  
『第5章 神並遺跡第19次発掘調査報告』協会2000  
『第6章 神並遺跡第22次発掘調査報告』協会2000
- 10: 『第1章 神並遺跡の概要』協会2000 P.5
- 11: 協会『鬼虎川遺跡北部の中・近世耕作地跡-浄化槽埋設に伴う鬼虎川遺跡第43次発掘調査報告書-』2000 P.9~11

# 神並遺跡第17次発掘調査平面図



東大版市文化財協会

財団法人 東大版市文化財協会

■ 遺構の位置  
 ■ 遺構の形状  
 ■ 遺構の規模  
 ■ 遺構の年代

■ 遺構の位置  
 ■ 遺構の形状  
 ■ 遺構の規模  
 ■ 遺構の年代

1:200



## 報告書抄録

ふりがな こうなみいせきだい17じはくつちようさほうこく  
書名 神並遺跡第17次発掘調査報告  
副書名  
巻次  
シリーズ名  
シリーズ番号  
編著者名 金村浩一  
編集機関 財団法人東大阪市文化財協会  
発行機関 財団法人東大阪市文化財協会  
作成法人ID 42710  
郵便番号 577-0843  
電話番号 06 6736 0346  
住所 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21  
発行年月日 2001.12.31  
ふりがな こうなみいせき  
遺跡名 神並遺跡  
ふりがな おおさかふひがしおおさかしにしいしきりちょう1ちようめ  
遺跡所在地 大阪府東大阪市西石切町1丁目7-1  
コード 市町村27227 遺跡番号 不明  
北緯 34・40・35  
東経 135・38・47  
調査期間 1994.09.19~1995.01.25  
調査面積 1461㎡  
調査原因 共同住宅建設  
種別 集落  
主な時代 弥生/古墳/古代/近世  
遺跡概要 弥生-河川 弥生土器/古墳-河川-土師器+須恵器+製塩土器+動物遺体/平安-備+  
掘立柱建物-土師器+須恵器+製塩土器+軒平瓦/近世-耕作跡-土師器+陶器+鐵器  
特記事項 特記なし

---

### 神並遺跡第17次発掘調査報告

2001年12月31日

発行 財団法人東大阪市文化財協会  
〒577-0843 大阪府東大阪市荒川3丁目28-21 TEL.06-6736-0346  
印刷 藤近畿印刷センター  
〒582-0001 大阪府柏原市木郷5丁目6番25号 TEL.0729-72-5918  
紙質 表紙・本文 ニューエイジ70.5kg  
製本 無線とじ



A地区東部機械掘削風景(西から)  
背景は生駒山